緑山河

第25号

平成24年5月15日
発　行
公益社団法人沼津牧水会

目　次

若山牧水の歌　2
暮坂峠「牧水まつり」に参加して　5
第16回 若山牧水賞 授賞式に参加して　9
第58回 沼津牧水祭
碑前祭・芝酒盛　13
短歌大会　14
第24回 雛の歌会　15
文化講座　16
サロン音楽の夕べ　18
平成23年度事業報告書　19
定款・編集後記　20

若山牧水の歌

大島史洋

毎日新聞の平成二十四年二月二十二日(水)の朝刊に、若山牧水の未発表歌が見つかったという記事が載っていた。見出しには「晩年の作か、直筆掛け軸」とあって、その掛け軸の写真も掲載されており、いかにも牧水らしい柔らかな滑らかな字で書かれている。

牧水が旅の途中などで書いて人に与え、そのまま記録することを忘れてしまった歌なのかもしれない。

その一首は、

かるたとりうめばすなはちとりいでゝ吹くはもにかも春の夜の曲

という歌である。かるた遊びに飽きてくると、すぐに次はハーモニカを取り出してきて春の曲を吹いている、といった内容で、牧水の長男(旅人)が家で遊んでいる様子をうたったものであるらしい。筆跡や歌の内容から晩年の作と推定されたようだ。

結句に「春の夜の曲」といった情緒的かつおおらかな言葉をもってきて、穏やかな夜の雰囲気をかもしだしているところなど、いかにも牧水の歌らしい作り方である。

牧水には大正二年(一九一三)、二十九歳のときに長男が生まれている。次男(富士人)が生まれるのは大正十年のことである。牧水が亡くなるのは昭和三年(一九二八)、四十四歳のときだから、この歌の作られた時期はかなり限られてくる。

現在のような高齢化社会と違ってこの頃の人には比較的早く世を去る人が多いが、牧水もその一人である。いつの年に作られた歌なのか、誰のために書かれた掛け軸なのかといったことも、今後、調査・研究されていくことだろう。

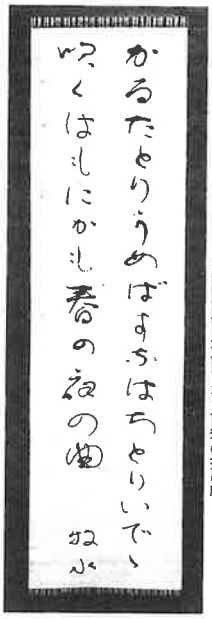
牧水には家族のことをうたった歌はそれほど多くはなく、そういった意味でこの歌は珍しいのではないかとも言われている。

この新聞記事でも牧水は、「旅」や「酒」を愛する歌人としてのイメージが強いと紹介されており、だから家族詠は珍しいとされるわけである。牧水の酒の歌といえば、すぐに、

牧水 未発表歌見つかる

晩年の作か 直筆掛け軸

宮崎の記念館



歌人・若山牧水の未発表短歌と確認された直筆の掛け軸

宮崎県出身の歌人・若山牧水(1885~1928年)の未発表の短歌1首が書かれた掛け軸が見つかったと、同県日向市の若山牧水記念文学館が21日、発表した。旅や酒を愛したイメージが強い牧水が、一家だんらんを詠んだ貴重な作品といい、子どもや家庭を大切にした素顔が伝わる。

歌は「かるたとり うめばすなはち とりいでゝ 吹くはもにかも 春の夜の曲」。牧水の長男が家でかるた遊びに飽き、ハーモニカを取り出して演奏した情景を詠んだという。

同文学館によると、短歌は牧水の直筆で、詠んだ時期や場所は不明だが、筆跡や内容から晩年の作品とみられる。昨年12月に個人収集家から掛け軸の寄託があり、調査の結果、未発表の歌と確認された。

同文学館職員の荒砂正伸さんは「牧水が家族を詠んだ歌はそれほど多くない。若山家の家庭のあり方に研究者の注目が集まり、牧水の新たな一面を知るきっかけになればいい」と話している。

掛け軸は4月中旬から同文学館で展示される。

平成24年2月22日の毎日新聞朝刊

白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけれ　『路上』
かんがへて飲みはじめたる一合の二合の酒の夏のゆふぐれ　『死か芸術か』

といった、人口に膾炙した歌がすぐ頭に浮かんでくる。

これは旅の歌についても同じで、

幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく　『海の声』
いざ行かむ行きてまだ見ぬ山を見むこのさびしさに君は耐ふるや『独り歌へる』

など、よく知られた歌がすらすらと浮かんでくる。牧水が愛した旅と、彼の寂しさとは一つのセットになっている。牧水は寂しさから逃れるために旅に出たのだと言ってよく、これは、酒の場合も同じであったと言えるだろう。次のような歌、

津の国は酒の国なり三夜二夜飲みて更らなる旅つづけなむ　『海の声』
昨日飲みけふ飲み酒に朽ちもせで白痴笑ひしつつなほ旅路ゆく　同

これらは旅にあって飲む酒がうたわれており、酒の歌とも旅の歌とも言えるものである。一首目の「津の国」は摂津の国（大阪府北西部と兵庫県南東部）で、灘などよく知られた酒の産地であるから牧水も楽しそうに酒を飲んでいる。あとの歌は同じときの作だが、ちょっと自虐的なところの見える歌である。

これらは第一歌集『海の声』に収録されているから牧水の二十代はじめの歌であるが、酒に対する陶酔的な面と自虐的な面とが共に出ている。牧水の晩年にいたるまで見られるこの特徴的な二つの面が、その最初から見られることがわかる。

牧水には確かに酒の歌は多いが、心からそれを楽しんでいるという歌は、それほど多くはない。

くちにふくめば疑ひもなきこのうまさやめられぬ酒の悲しかりけり　『砂丘』
口にしてうまきこの酒こころにはさびしみおもひゆふべゆふべ酌む　『くろ土』

これらの歌では酒のうまさをうたってはいるが、一方では、やめられぬ酒が悲しいとも言い、寂しさを抱きながら飲んでいるのだとも訴えている。

牧水は酒が心底好きであったけれど、それは自分のどうしようもない寂しさから逃れるためでもあった。

酒すすればわが健かの身のおくにあはれいたましき寂しさの燃ゆ　『路上』
酒飲まむ酒飲まむ今しきはまりてわがさびしさの凍らむとすに　『秋風の歌』

しかし、酒を飲んでも寂しさはなかなか晴れてはいかない。これは旅をしていてもそうで、牧水の寂しさは生来のものとして生涯にわたってつきまとった。いまあげた歌のように、その寂しさをとりつくろうことなく、おのれをそのままに晒してうたっている。

酒を飲みすぎると体に悪いということくらいは、若い頃から知っていた。そういう歌もたくさん見られる。

わが歌を見むひとわれのおとろへて酒飲むかほを見ることなかれ　『路上』
酒飲めば鼻よりうすく血の出づる身のおとろへをいかに嘆かむ　同

こうした歌は実に多く、読んでいて悲しくなってくる。医師から酒をやめよと言われたことも、素直に歌にしていて、

酒やめてかはりになにかたのしめといふ医者がつらに鼻あぐらかけり『くろ土』
人の世にたのしみ多し然れども酒なしにしてなにのたのしみ　同

こんな歌も作っている。

しかし、牧水は最後まで酒をやめることはなく、その歌は次のような広い振幅のなかに延々と続いている。一方は、寂しい感じだけれど比較的穏やかな歌、もう一方は激しく自分を責める自虐の歌である。

酒飲めばこころ和みてなみだのみかなしく頬をながるるは何ぞ　『路上』

いざいざと友にさかづきすすめつつ泣かまほしかり酔はむぞ今夜　同

これらは酒によってこころがなごんでいる歌だが、その根底にはどうしようもない悲しさがひそんでいる。若い頃の酒に見られる女遊びに通じるような明るさ、軽さが漂っているが、こちらの歌のほうが沈んだ気持ちのなかにも穏やかな雰囲気が感じられるような気がする。

それに対して次のような歌、

ささうさ、鼹鼠のやうに飲んでやる、この冬の夜の苦い酒　『みなかみ』

熟れ熟れて果実あやふく散るごとく酔は身うちに破れむとする　『秋風の歌』

モグラのように飲んでやるという一首目の歌には、やけっぱちのような牧水の落ち込んだ暗い心がうたわれている。あとの歌はちょっと無気味な感じである。爛熟した果実のように体の中で破れていく酔い心地、これは、酔いの楽しさというよりも苦行のように見える。どうしてこうまでして飲まなければならないのか。

牧水が酒を好む気持ちには、多くの酒飲みが共感するところだが、実際の牧水はそんな共感を越えたところまで進んでいってしまっている。そこが牧水のすごいところで、なまじの酔っ払いとは違い、表現者として最後のところで踏ん張ろうとしている。

なんとかして最後は逃げないでこの酔いの中にうごめいている感情をうたいたいと何度も何度も挑戦している。そんな牧水の苦闘を感じないわけにはいかないのである。

牧水の第四歌集『路上』は明治四十四年に刊行されている。牧水二十六歳ころの作品が収められており、巻頭には次のような歌が見られる。

海底に眼のなき魚の棲むといふ眼の無き魚の恋しかりけり　『路上』

光無きいのちの在りてあめつちに生くとふことのいかに寂しき　同

「眼のなき魚」「光無きいのち」、この絶望的な寂しさの背後には恋人との間でのどうしようもない苦悩が秘められていると鑑賞されているが、そうしたことを考えに入れないでも、ここには、光を求めて得られない暗闇の中の牧水の姿が象徴的なかたちでうたわれており、ここに、牧水の歌の生まれてくる根源があると私は思ったのであった。

【筆者プロフィール】おおしま　しょう

昭和十九年岐阜県生れ。早稲田大学大学院国語学専攻。三十五年未来短歌会入会、現在『未来』編集委員。歌集に『藍を走るべし』『わが心の帆』『燠火』『封印』『センサーの影』ほか。山本健吉文学賞、日本歌人クラブ賞、短歌研究賞、若山牧水賞をそれぞれ受賞。平成二十三年十月二日開催の第五十八回『沼津牧水祭・短歌大会』の講師。

筆　者（若山牧水墓所前にて）

暮坂峠「牧水まつり」に参加して

千野慎一郎

暮坂峠「牧水まつり」への参加の一行は、塩尻から乗車予定の二人を除く二十名で、十月十九日午前八時に沼津駅北口を中型バスで出発した。東名高速道路の御殿場ＩＣを経て、須走から東富士五湖道路に入った頃から陽が射してきて快適なドライブ日和となってきた。中央自動車道に入り、甲府盆地を過ぎると車窓の前方に八ヶ岳連峰が、左手には南アルプスの甲斐駒ケ岳が青空を背にバスの動きに合わせて姿を変えて車窓を楽しませてくれた。

長坂ＩＣで最初の訪問地、清春白樺美術館に寄るために高速道を下りる。のどかな田園風景の中に清春芸術村はあった。清春白樺美術館を中心に、ジョルジュ・ルオー礼拝堂、梅原龍三郎アトリエ、パリ・モンパルナスのアトリエ「ラ・リューシュ」を模したアーティスト達の創作の場や今春、安藤忠雄設計によるスペインの巨匠アントニ・クラーベのギャラリーとして、光の美術館が芸術村開村三十年を記念して開館した。

清春白樺美術館は、白樺同人に強い影響を与えたジョルジュ・ルオーの国内有数のコレクションで知られている。第一展示室には、白樺派の画家梅原龍三郎、岸田劉生、中川一政の作品が、第二展示室にはジョルジュ・ルオーの作品、特別展示室には日本画の巨匠東山魁夷のエッチング等の多数の作品を、思いがけずも鑑賞することができた。桜の老木に囲まれた広場には、奇妙なエッフェル像や樹上の茶室もあり、清んだ高原の空気を感じながら一時間の見学を終えて塩尻に向う。昼食は紹介された手打ちそばの店「山麓亭」でとる。手打のざるそばに、野菜の掻揚げがついた昼食を美味しくいただいてから、塩尻短歌館に着いたのは午後二時近くだった。

東京から合流予定の東京牧水会会長の田原大三さんと早大教授の乳井昌史（にゅうい）さんは早々に着いていて、我々を出迎えてくれた。塩尻短歌館は二十年前に開館し、木造本棟造りの築百五十年の民家を改修した本館とＲＣ造土蔵造りの展示棟、後に増築された鉄骨造の学習交流室で構成されている。本館土間の小上がりのホールで上條館長から、牧水・喜志子を通じての沼津と塩尻の両文学館の縁と遠方からの来館を歓迎する挨拶を受け、続いて館の概要説明があった。入館者数は年間約五千人で、運営費は年間六百万円という安さには驚きであったが、展示物も豊富で工夫が凝らされていた。特に、牧水夫人喜志子の作品や資料は興味深く、喜志子の妹潮みどりのほか四賀光子、中原静子等の信州女流歌人の足跡も目を引いた。

塩尻短歌館

喜志子は、ここ広丘に生まれ、広丘小学校の教師時代に校長として赴任してきた歌人島

木赤彦に出会い、その後赤彦の友人である太田水穂と、さらに水穂と歌を通じて知り合っていた牧水と出会い、やがてラブロマンスにも発展していった。明治時代の短歌の大きな流れを作った島木・太田・若山の三人を中心とした歌人たちが、旧広丘村を中心に深い関わりを持ち、互いに刺激し合いながら創作活動に没入していた。まさに塩尻の広丘は短歌のふるさとであった。

広丘の歌碑公園にある牧水歌碑前にて

観覧後、隣接の桔梗ヶ原の松林を整備した歌碑公園を散策し、大きな自然石の牧水歌碑前で記念撮影におさまる。出発間際にすぐ近くの「雲居鶴」名物の塩羊羹をお土産に買い込んで、長野道塩尻北ＩＣに入ったのは、予定より遅れて午後三時を回っていた。長野道から上信越自動車道の上田菅平ＩＣを下りたのは四時半も過ぎ夕暮が近くなってきていた。

菅平・草津方面へ向う一四四号線沿の木々には未だ早いのか紅葉の美しさは見られなかったが、浅間山を見ながらの急坂を約一時間、長野原から六合への分岐点に着いたのは、五時半で陽はとっぷり暮れていた。

上野の草津の湯より
沢渡の湯に越ゆる路
名も寂し暮坂峠　　「枯野の旅」

暮坂峠の入口となる県道五十五号線の生須から峠までの８㎞の間に、十四基の牧水の歌碑が地元の建設委員会で整備されている。当初の予定では、ここから牧水の「歌碑めぐり」をしながら宿に向う予定であったが、翌朝の「牧水まつり」への参加前に変更することとなった。真っ暗な闇の中、バスはゆっくり暮坂峠への九十九折れの道を進む、文字通りの暮坂峠越えとなり、宿の沢渡温泉「龍鳴館」に到着したのは六時十五分を過ぎていた。この「龍鳴館」は経営者も代わり、名前も変っているが、牧水が立寄った「正榮館」があった場所だということで、宿泊場所に選ばれていた。無色無臭で泉温は高めであったが、源泉かけ流しのいい湯に浸かり、七時半からの大広間での夕食に向う。楽しい宴会は、隣接小部屋の二次会に引き継がれ十一時頃まで談笑や歌やらで、思い出深い一夜となった。

沢渡温泉「龍鳴館」前にて

旧六合村から暮坂峠への山道にある牧水歌碑前にて

翌朝は、さすがに標高も高いためか冷え込みが厳しかったが、快晴で、清々しい朝を迎えた。朝食を八時にとり、九時に旅館前で記念撮影後、前日できなかった「歌碑めぐり」に暮坂峠を逆コースで下った。前夜闇の中で見えなかった沿道の渓流や、樹林、紅葉の美しさに感動する。牧水も暮坂峠を越え四万温泉に向かう旧六合村の山野に感動して五十余の歌を残している。歌碑一番から十四番までを順次、石碑については全箇所で下車して記念撮影し、木製の歌碑はゆっくり走るバスの中から見学しながら、暮坂峠「牧水まつり」会場に着いたのは十時四十分頃であった。

開会は十一時ということで関係者は準備に忙しく、地元ボランティア団体の出店の準備は整いつつあった。式典場は県道五十五号線沿いの紅葉の美しい斜面高台の牧水詩碑を背に設営されていた。

暮坂峠の牧水詩碑

暮坂峠「牧水まつり」開会式

沼津牧水会メンバーが全員揃いの法被を羽織って式典に臨んだため、会場の注目を浴び、大きな歓迎も受けることとなった。「牧水まつり」は十一時に開会、最初に主催者を代表して牧水詩碑保存会町田庄一郎会長が挨拶され、その中で沼津牧水会、東京牧水会、土肥牧水会が遠方からの出席者として紹介された。続いて、市川薫副会長による詩碑への献酒が行われ、一同礼拝の後、副会長で沼津にも来

られたことがある中沢久吉さんによる「枯野の旅」が朗読された。来賓挨拶に入り、一番手は地元中之条町の若くてダンディーな入内島町長が歓迎の挨拶をされる。

中之条町は「日本で最も美しい村」連盟への加盟の他に、映画ロケ地や手作りの映画祭を開催するなど、文化に力を入れていることでも知られてきている。

次に、地元官庁を代表して吾妻県民局長と吾妻森林管理署長が挨拶、四番手に我が沼津牧水会の林茂樹理事長の力強く格調高い挨拶に感動を覚える。さらに、「牧水まつり」四回目参加の東京牧水会の田原大三会長も続いた。最後は、市川副会長の挨拶で式典を終了し、その後、吟詠やコーラス等のアトラクションが行われ流れ解散となる。昼食には、ボランティアによる温かい「きのこ汁」のサービスを受け、差し入れのおにぎりをほおばりながら、十二時半にまつり会場に別れを告げる。途中、街道沿いの旧大岩学校を活用した木造茅葺きの牧水会館に寄り、歌碑の前で記念撮影後、理事長の提案で四万温泉に向う。

牧水が「みなかみ紀行」の中で、沢渡温泉から四万温泉に向かい投宿し、不快な印象を受けたと書かれていた旧田村旅館を探し当てたのである。四万温泉郷には、入内島町長実家の温泉旅館「四萬館」もあると聞き、ご挨拶に寄りがてらトイレ休憩までさせていただく。大女将に出迎えを受け、町長夫人の美人若女将に送られて四万温泉を後にする。

旧大岩学校敷地内の牧水歌碑前にて

バスは四万川沿から関東の耶馬溪と言われる岩肌の断崖の続く吾妻渓谷の支流に沿って関越自動車道に向う途中で、女性陣の土産の買い物要望にも応えて二箇所の道の駅に立ち寄る。東京から参加のお二人がJR吾妻線の中之条駅で下車された後、一路バスは渋川伊香保ICへ向う。ICに入ったのが四時二十分。高安SAでトイレ休憩後、混雑が想定される都心を避けて鶴ヶ島JCから圏央道に入り、八王子からは中央高速道経由で大月JCに六時二十分、車の流れがスムーズなこともあり、当初車内持込みでの夕食を変更し、御殿場ICを下りてから夕食をとることに決まる。御殿場IC近くの「金太郎」で夕食をゆっくり取り、沼津駅北口に午後十時前に予定通り帰着することができた。お疲れさまでした。

あさひ観光バスの長澤義和社長には、メンバーとして参加の上、添乗員としてお世話をいただき、ありがとうございました。また、ドライバーの佐藤さんには、安全運転に加えてカメラマンまでお願いしてしまいました。今回ツアーの企画と庶務を担当し、記録係としても奔走された事務局の大島さん、ご苦労さまでした。そして、二日間楽しくご一緒していただいた参加者の皆さまに心よりお礼を申し上げます。

なお、文中では「歌碑めぐり」等の牧水の歌や詩を数が多いこともあり、紹介できませんでしたが、「みなかみ紀行」や「枯野の旅」をご覧ください。

（本会会員　千野建築都市設計事務所長）

第十六回 若山牧水賞 授賞式に参加して

浅井 治

平成二十四年二月五日（日）午前十一時半に沼津駅前に着いた。十二時集合となっているが、長澤靖夫君、三宅芳則さん、原悦子さん、事務局の大島葉子くんが既に来ている。後は林茂樹君か、そんなことを思っているところへ、長澤君・林君と共に高校の同級生である仁王伊佐夫君が現れた。わざわざ差し入れを持って来てくれたのだ。二月五日から宮崎へ行くと話はしてはあったのだが、ありがたいことである。仁王君に礼を言っているところへ林君も到着した。

今回、第十六回目となる「若山牧水賞」（宮崎県、宮崎県教育委員会、宮崎日日新聞社、延岡市、日向市の主催）の受賞者に決まった鎌倉瑞泉寺住職の大下一真氏が長澤君の御奥様の小中学校時代の同級生であることから、理事長の林君に誘われて、長澤君と一緒に授賞式に参加しようかと話をしていたが、事務局から参加者を募ったところ、三宅、原の両氏が応募してくれた。事務局の大島くんを加えて六人での参加となった。日向市で平成二十二年十月に開催された「若山牧水顕彰全国大会」へ参加したときと同様に、今回も長澤君が林君から頼まれてツアーの企画を立ててくれた。長澤君は旅慣れていて、色々な観光ポイントを熟知している。飛行機嫌いな林君のために、今回は大阪からフェリーで宮崎入りすることになった。

十二時前に全員が集合したので、予定より一本早い電車で沼津を出発。東海道線で三島まで行き、新幹線で新大阪へ。大阪までの約三時間、仁王君差し入れの焼き鳥やチョコレートをつまみながら、持参したお酒を和気藹々（あいあい）と酌み交わす。

新大阪駅から市営御堂筋線―市営中央線―市営南港ポートタウン線へ乗る。地下鉄を乗り継ぎ、バスに乗って大阪南港のフェリーターミナルへ。それにしても、長澤君は、地図が頭に完璧に入っているらしく、新幹線のホームから地下鉄乗り場まで迷わず的確に移動していく。我々はひたすらついて行くだけだ。午後四時半フェリーターミナルへ着いた。

港には、フェリーが二艘停泊している。どちらの船に乗るのだろうかなどと話をしながら、一艘のフェリーの写真を撮る。宮崎行きは、写真を撮った船ではなく、もう一艘のフェリーだった。写真を撮っていた船は鹿児島行きだそうだ。宮崎行きの「おおさかエキスプレス」への乗船手続きをしているうちに出発時間が近づいた。午後五時に乗船、部屋に落ち着く。男性陣は一等の四人部屋、女性は個室である。なんでも、一等室は、四人部屋か個室で、二人部屋は特等となるらしい。これも宮崎が新婚旅行のメッカであった頃の名残りなのか。

一時間後に出港となった。出港と同時に夕食が始まった。バイキング形式の夕食もそこ

フェリーの前での記念撮影（宮崎港）

そこに、四人部屋で宴の開会。長澤君と原さんがいろいろとつまみを用意して来てくれている。お酒を飲まない長澤君が我々のために持って来てくれた特別純米大吟醸「獺祭（だっさい）」（山口県岩国市）と「雪漫々」（山形県天童市）を美味しく頂戴した。翌日の運転手をやってくださる三宅さんが、一足早く就寝し、日が変わるころにお開きとなった。

二月六日、午前八時四十分に予定どおり宮崎港に到着。タクシーで宮崎駅前のトヨタレンタカー宮崎店へ移動。三宅さんの運転で青島を目指す。「鬼の洗濯板」と呼ばれる波状岩を眺めながら、小雨模様の中、青島神社、日向神話館を見学。天照大神から、天孫降臨、海幸彦・山幸彦、神武天皇の大和平定までを蝋人形で表現。展示室内の冷気に震えながら外に出て、駐車場まで戻る途中、牧水の歌碑を見つける。

青島の「鬼の洗濯板」

檳榔樹（びらうじゅ）の古樹（ふるき）を想へその葉蔭（はかげ）海見て石に
似る男をも

そういえば、青島に歌碑があったということを思い出す。牧水に関係した旅である。みんなで記念写真を撮る。

慣れない船旅で、みんな睡眠不足でもあり、早めの昼食にして、ゆっくりしようということになった。昼食は、イタリアンレストラン「ソレイユ」。長澤君が、以前食事をして美味しかったとのことで予約をしてくださっていた。ガラス張りの明るい店内で気持ちがいい。前菜、スープにメインディッシュ、デザートとつづく。朝、船酔いをしたと言って元気のなかった大島くんが元気よく食事をしている。現金なものだ。

宮崎観光ホテルへチェックインをし、レンタカーを返却して、ホテルへ戻る間、ほんの少し、宮崎の町を歩いてみた。

「檳榔樹・・・」の歌碑

午後三時、若山牧水賞の授賞式が始まった。日向市立坪谷小学校の生徒さんの牧水の歌。日向市での若山牧水顕彰全国大会でも聴いたが、何度聴いても素晴らしい。河野俊嗣宮崎県知事の挨拶の後、選考委員の伊藤一彦氏から受賞者の大下一真氏の紹介があり、外山三博宮崎県議会議長の祝辞につづいて、選考委員の佐佐木幸綱、高野公彦両氏の講評があった。佐佐木氏は、「過去の受賞者は都会の人が都市を詠ったが、大下氏は郊外の歌、自然を

馬場あき子先生の記念講演

詠う。そんな魅力は、郊外を旅している牧水の歌にも通じるものがある。現代短歌は、人を懐かしくなせるものが少なくなった中、この歌集は、人を懐かしくさせる」。高野氏は、「作品の特徴として、振り仮名が少ないこと。難しい言葉を使っていない。窪田空穂は、いい歌を作ろうと狙っておらず、結果秀歌が出来ていくが、大下さんもその様な歌人である。現代短歌は、秀歌狙いの傾向が強いが、大下さんは、空穂の生き方を受けついでおり、警鐘までいかないが、それでいいのかと反省させてくれる貴重な存在だ」と評した。

つづいて、選考委員の馬場あき子氏の「牧水の旅に思う」という演題で記念講演が行なわれた。歯切れのよいテンポで進む馬場先生の話をたのしく聴いた。

授賞式の後、ホテル内の会場を移して、五時半から約二時間、受賞祝賀会が行われた。延岡の千徳酒造の日本酒を飲みながら、宮崎の方々と旧交を温める。祝賀会が終った後、私は宮崎にいる大学時代の友人と連絡をとり、久しぶりに会って、深夜まで昔話に花を咲かせた。

二月七日、九時三十七分の特急「にちりん八号」で延岡へ。若山牧水延岡顕彰会の塩月眞氏、田丸眞氏、上田耕市氏、南裕之氏が出迎えてくださった。城山の牧水歌碑と鐘を案内していただき、牧水歌碑の前で記念写真を撮ったのち、割烹「国技館」で「鯖茶漬け」をご馳走になった。鯖が苦手な長澤君は、鯛茶漬けをいただいた。食後、延岡顕彰会の方々と一緒に受賞記念講演会が行なわれる「カルチャープラザのべおか」へ向かった。

受賞者の大下一真氏を囲んで（祝賀会場にて）

大下一真氏の講演に先立ち、ゆりかご一ヶ岡保育園の園児による牧水短歌朗詠が行われた。この保育園の牧水短歌朗詠は、塩月氏が指導をしているとのことで、揃いの着物に袴姿の園児たちの朗詠に拍手が沸いた。前日同様、伊藤一彦氏から大下一真氏の紹介があり、大下一真氏の「若山牧水と窪田空穂」と題し

城山の牧水歌碑前で

た講演が行なわれた。同時代を生きた牧水と空穂の関係を分かり易い言葉で話をしていただき、たのしい講演会であった。

講演会終了後、上田耕市氏の菓子店「虎屋」でお茶をいただきながら、延岡の方々と一層の交流を図ったのち、駅まで送っていただく。

延岡から特急「にちりん」に乗って別府温泉へ。沼津牧水会の企画で何回か宮崎へ行ったが、必ずと言ってよいほど旅程を伸ばして観光をしている。今回、私が「河豚を食べたい」と希望を出したところ、長澤君が企画してくれた処が別府温泉だった。別府温泉ホテル「白菊」が宿泊場所だ。

ゆっくりと温泉に浸かり、旅の疲れをとった後に晩餐会。日本酒で乾杯したところ、何となく気分が乗らない。私の希望を容れていただき、河豚と豊後牛のご馳走だったのだが、河豚をほんの少し食べただけで、豊後牛までは・・・。お酒も美味しくない。前夜大学時代の友人と夜遅くまで飲み過ぎたためだろうか、温泉に浸かり過ぎたためだろうか。皆に心配をさせてしまったが、早々に休ませてもらう。

二月八日、今回の旅程の最終日。前夜の気分の悪さは嘘のように消えている。きっと、温泉に浸かり過ぎたためだったのだろう。

杵築市の武家屋敷風景

別府温泉に来たのだからと、別府温泉「地獄めぐり」をすることになっている。バスで廻る予定だったが、名ツアーコンダクターの長澤君がジャンボタクシーをチャーターしてくれた。コバルトブルーの色が美しい「海地獄」、熱泥が絶え間なく吹き上がる様が坊主頭のような「坊主地獄」、別府市指定天然記念物の間欠泉で、世界の間欠泉の中でも休止時間が最も短いという「竜巻地獄」、酸化鉄・酸化マグネシウム等を含んだ赤色の粘土を噴出し、池一面が真赤な「血の池地獄」、駆け足で「地獄」を巡ったが、それぞれたのしかった。

別府から特急「ソニック」に乗り、杵築市に着く。旅の最後は杵築の城下町散策だ。駅からタクシーで二十分ほど走ると、「杵築ふるさと産業館」に着いた。ここから「きつき観光ボランティアガイド」の工藤さんの案内で、武家屋敷を巡る。江戸時代の面影を残す土塀や白壁が続く街並を歩きながら、杵築藩家老の屋敷であった「大原邸」、ギャラリー喫茶になっていて邸内でお茶がいただける「能見邸」、代々町医者で、藩医も勤めた「佐野家」、城下町復元模型を見ることのできる「きつき城下町資料館」。サンドイッチ型の城下町というのだそうだが、坂を登り下りしながらの、あっという間の三時間だった。

午後四時三十四分発の特急「ソニック」で杵築を出発、小倉で新幹線に乗り換え、午後十時五十六分、無事に沼津駅に着いた。

今回も長澤君の綿密な計画と案内のおかげで、たのしく充実したツアーであった。ただただ感謝のみである。悔やむのは、別府温泉の宿で、長澤君が特別注文してくれていた素敵な料理を食べられなかったことである。またの機会を期待したいと思う。

（本会理事　歯科医）

第58回沼津牧水祭

碑前祭・芝酒盛

十月十六日(日)午前十一時

左から、榎本館長・城内市議会議長・
石川錬治郎・小林理教・栗原市長の各氏

未明までつづいた激しい雨と風も、明けてみれば全くの快晴、すこし風は残ったが願ってもない好天に恵まれることとなった。かすかな松籟の中、大正琴の音が流れ、はじめにあいさつに立った林茂樹理事長は、今年、日本を襲った未曽有の災害、東日本大震災にふれ、中でも福島第一原子力発電所の事故について、「安全神話を許してきた我々世代の責任を痛感し、自然への畏怖の念を忘れてはならない」と、また、大きな風水害をもたらした台風十五号についてもふれ、「この千本松原も被害を受けたが、かつて牧水は松の伐採計画に反対し、この松原を守った経緯がある。その牧水を偲んで行っている沼津牧水祭を、今後とも我々の生き方を考える縁(よすが)としたい」と述べた。

来賓を代表して、栗原裕康市長、工藤達朗教育長からご祝辞をいただいたあと、榎本篁子館長が献花・献酒につづいて挨拶し、「三・一一は人の生き方が問われるものではなかったか。人は自然の一部であって、自然に生かされている。私たちが次の世代に残す最大のものは環境であろう。牧水は百年の計を考えて、松原の伐採計画に反対した。次世代を担う若者たちのためにも、私たちができることを、今なさねばならない」と語った。

ここで、ご遠方からご参加いただいた牧水生誕の地宮崎県から日向市東郷町若山牧水顕彰会の小林理教会長、日向市文化スポーツ課の三浦元生牧水係長、東京牧水会の田原大三会長、元秋田市長の石川錬治郎氏の各氏が紹介された。

そして、花柳寿宗師による日本舞踊。牧水の高弟故大悟法利雄氏の朗詠になる牧水の短歌四首と長詩「枯野の旅」をバックに、いつに変わらぬ艶麗な舞の披露。次いで演奏された青木畝堂氏の尺八の音は遠い潮騒と混じり合い、得も言われぬ雰囲気が会場に漂った。

つづいて、中学生短歌コンクールの表彰式に移り、応募市内一五校一八七七首から選ばれた特選十首が発表され、講評および表彰が行われた。このあと、「牧水のうた」を歌う会による合唱があって碑前祭の式典が終了した。

恒例の鏡割り、城内務市議会議長の音頭による乾杯で、いよいよ芝酒盛の始まりです。一人で楽しむもの、二人で睦まじくするもの、三人五人と語り合うもの、莫蓙(ござ)の上に胡坐(あぐら)をかき、あるいは車座となり、各々がこの秋の好日とお酒そして牧水のご縁を満喫しているようであった。

岳心流沼津愛吟国風会の詩吟、ぬまづ観光ボランティアガイドの合唱、沼津ハーモニカクラブ、裾野五竜太鼓保存会とつづく毎年定番となっている出し物が登場し、飽きることがない。最後は、みんなで歌おう「日本のうた」。今回から加わった新たな催しである。参加者全員の合唱で締めくくられた。立ち去り難い気持ちでの散会は午後二時、日はまだ高かった。

(本会会員　河辺龍二郎)

第58回沼津牧水祭 短歌大会

十月二日(日)
午前十時三十分
沼津市立図書館
視聴覚ホール

沼津牧水祭短歌大会は、講師に大島史洋先生をお迎えして開催されました。出詠歌は百三十四首出席者八十三名です。須永秀生氏の司会で始まりました。氏は、常連の方々が年々少なくなっており、碑前祭にも歌人の参加が少なくなっているので、ぜひ参加してもらいたいと言われました。曽根耕一氏から講師紹介がありました。

大島史洋先生は「未来」の編集委員をされており、数々の歌集を出版し、受賞もされており、最近では平成二十一年『センサーの影』が第十四回若山牧水賞を受賞されました。

先生の講演は、「短歌を読む楽しさ」について語られました。短歌の素材は色々あるが、人から詠むか、物から詠むか、そして自分だけの詩歌集アンソロジーを持つ。例えば、花の場合「牡丹」「紫陽花」など分類しておくそれによって自分のうたの位置が見えてくる。人については、河野裕子、小島ゆかり、栗木京子の三者を取り上げ、それぞれのうたをプリントにして渡してくださいました。

河野裕子氏のうたは子供や御主人への思い、人の生き方と社会を見つめ自分の生き方に激しさを表わしている。小島ゆかり氏のうたは、やさしいが迫力がある。栗木京子氏は社会詠が多く、自分なりの機智でうたをすくいあげている。このようにそれぞれのうたを鑑賞しながら話してくださいました。

アララギ派の歌人中村憲吉の柳の説を引用され、「柳が風に揺れている」「柳が地を這うように揺れている」歌は平凡な事を歌ってもちょっとした発見が平凡な中に新鮮さが出る。そこで自分が何を見るか、またまた扇の要の話もされ、短歌の要は下句において一点をきちっとしめること、心の揺らぎ、微かなものを、どうとらえるかが短歌の勝負である。自分なりのテーマを持って、アンソロジーを作る。そういう楽しさを持つことによって、歌を味わい、作歌する力が付いてくると言われました。とても分かりやすく、うたを作る楽しさと楽しみ方を教えてくださいました。午後の部は、出席された方の歌評をされ、講演をいただいたことを頭に入れて鑑賞することができました。

（本会会員　杉山治子）

講師選の「牧水賞」と互選賞の上位三首

牧水賞一席　沼津市　一杉智子
コスモスの押花貼れる転居通知高原ホームに行きし姉より

牧水賞二席　浜松市　太田瑞代（たまよ）
このわたしの佇（たたず）まいに何を見るだらう
四十年経て友と逢ふとき

牧水賞三席　沼津市　増井春江
夏帽子かぶりて水まく幼子の写真にけさも「おはよう」を言う

市長賞　神奈川県三浦市　椙山良作
先代を継ぎて商う魚屋の声歯切れよし初鰹買う

市議会議長賞　千葉県流山市　葛岡昭男
磨耗して鈍き艶出す印鑑を拭いて長きの勤めを終える

教育長賞　富士宮市　小松和子
老いたれば農も叶はぬ放置田に雉の親子がいつか棲みつく

第24回 雛の歌会

三月三日(土)
午後一時三十分
沼津市若山牧水記念館ラウンジ

前日の雨が止み明るい光の中、講師に川野里子先生をお迎えし、出席者六十名程の落ちついた会になった。和服姿の先生がとても素的でまぶしかった。「雛の歌会に合った着物で来ました」と、淡いグレーの地に白い花模様の着物、帯に童の絵柄がとてもかわいく思わず見惚れてしまった。

歌評は丁寧完璧、長過ぎず短か過ぎず、作者一人ひとりを納得させうる解き方で、短歌とは何か、基本をしっかり教え込まれたような、とても満足のいく講義であった。完成していると思える歌でも言い過ぎの部分があったり、使い古された言葉を使うことで歌がつまらなく見えてしまうと。

参考になる歌をいくつかあげてみよう。

働きて働き過ぎて病める息子の荒れしその手を握りて泣きぬ　露木みつ江

結句の「泣きぬ」が余分で、それを言わない方が読者を引き寄せる。全てを言ってしまうと読者は逆に引いてしまう。完成させ過ぎず少し手前でこらえる表現を。

朝なさなのつぺらぼうのをみなたち目を描き眉描き唇を描く　長野堯子

捉え方が狂歌、川柳の様だ。短歌は情緒の容れ物。心の襞を作品に入れたい。例えばこれを「わが妻」のことに限定すると短歌らしくなる。

昨年まで空室なりしアパートの窓ほのぼのと春の灯ともる　一杉智子

「ほのぼの」と春は無理やり引き離せ！「ほのぼの」を生かすなら例えばトイレの灯にするとか、日常くっついている言葉は分けてみる、カラリとした晴天などの常套句を一度やめてみること。

次に先生が佳しとされた歌をいくつかあげてみる。

小浜山刑場跡の桜樹を行きに眺めて帰りに見上ぐ　伊藤　純

歴史のある場所、どんな人がどんな思いで…と考えさせられる、刑場の桜は深い。帰りに見上ぐるあたり、余り言わない方が読者にも思いを分ける。

障子張る建具の隅に夫の文字「東手前」と書かれていたり　川辺典代

「東手前」が良いね、西後方なんていうより、こんなささいなことで、ふっと夫の人柄を思わせる、あとひとつ「男らしさ」筆で太く書いてあったとか、入れると良いね。

この先は抜けられるとふ細道を行つたきりにてたれも戻らず　杉山春代

あたりまえのことなのに何か気がかり、人生に重ねて読ませる所が巧み。

市長よりの安全宣言添へられてふるさと会津の柿が届きぬ　福西美枝子

「ふるさと」という言葉は歌の中で使いづらいが、この作品ではまっている。

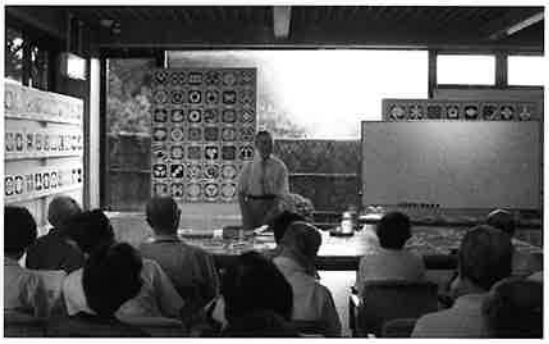
余談になるが、冒頭の挨拶の中で「牧水が沼津に住んだ理由のひとつは、生地宮崎と似ているからではないか、海の風景が似ていると思った。牧水のキーワードのひとつは『海』だ」と言われたことが印象に残った。

（本会会員　近藤ゆみ子）

文　化　講　座

家紋について

日 時　平成23年９月３日(土) 午後１時30分～３時45分
講 師　八十濱　俊一氏



戦後の短歌について

日 時　平成23年10月30日(土) 午後１時30分～３時30分
講 師　曽根耕一氏

茶の湯と美意識

日 時　平成23年11月19日(土) 午後１時30分～３時30分
講 師　四方一弥氏

文　化　講　座

初心者のための短歌講座（午前）　牧水記念館短歌会（午後）

日 時　平成23年4月～平成24年3月　毎月第2土曜日　午前・午後（全11回）
講 師　須 永 秀 生 氏

牧水記念館俳句会

日 時　平成23年4月～平成24年3月　隔月第4日曜日　午後（全5回）
講 師　榎 本 好 宏 氏

書　道　講　座

日 時　平成23年4月～平成24年3月　毎月第3火曜日　午後（全10回）
講 師　成 田 真 洞 氏

サロン音楽の夕べ

沼津市若山牧水記念館ラウンジ

男性コーラス《夢鳴群》
日本 心に残る、思い出の歌

日　時：平成23年６月11日(土)
　　午後６時30分
出　演：夢 鳴 群（コーラス）
　　中川貴久美（ピアノ伴奏）
　　大古田郷子（マリンバ）
来場者：125人

古楽コンサートシリーズ26
うたとチェンバロの夕べ

日　時：平成23年10月22日(土)
　　午後６時45分
出　演：萩原明美（ソプラノ）
　　小林教子（ソプラノ）
　　杉山佳代（チェンバロ、
　　クラヴィコード）
来場者：110人

ヴァイオリンと尺八で奏でる
「日本の心」～蝋燭の明かりとともに～

日　時：平成24年２月25日(土)
　　午後６時30分
出　演：山内達哉（ヴァイオリン）
　　大河内淳矢（尺八）
　　小堺　香（ピアノ）
　　井尻兼人（チェロ）
　　鍋山純男（蝋飾人）
来場者：134人

古楽コンサートシリーズ27
ヴィオラ・ダ・ガンバとチェンバロによる
Ｊ.Ｓ.バッハの夕べ

日　時：平成24年３月17日(土)
　　午後6時45分
出　演：品川　聖（ヴィオラ・ダ・ガンバ）
　　杉山佳代（チェンバロ）
来場者：110人

平成23年度事業報告書

総　会（第25回総会）　平成23年5月12日(木) 午後6時～7時
臨時総会　平成23年12月7日(水) 午後6時～6時30分
理事会　第1回（通算129回）平成23年4月19日(火) 午後6時～7時25分
第2回（通算130回）平成23年8月30日(火) 午後6時～7時
第3回（通算131回）平成23年11月11日(金) 午後6時～6時30分
第4回（通算132回）平成23年12月6日(火) 午後6時～7時
第5回（通算133回）平成24年3月16日(金) 午後6時～7時25分

会　報　第24号　平成23年5月15日発行
館　報　第47号　平成23年9月15日発行
第48号　平成24年3月15日発行

1　調査研究事業

(1) 第12回「百草園牧水歌碑祭」（主催：東京牧水会）
日　時：平成23年8月21日(日) 正午
会　場：東京都日野市百草園　牧水歌碑前
参加者：林　茂樹、浅井　治、金子安夫、小出和夫
芹澤則子、原　悦子、三宅芳則、大島葉子

(2) 第61回「牧水祭」（主催：宮崎県日向市）
日　時：平成23年9月17日(土) 午前10時
会　場：日向市東郷町坪谷 若山牧水生家及牧水歌碑前及び牧水公園ふるさとの家
祝電打電

(3) 第55回「牧水まつり」（主催：牧水詩碑保存会）
日　時：平成23年10月19日(水) ～ 10月20日(木)
会　場：群馬県吾妻郡中之条町　暮坂峠
参加者：林　茂樹、浅井　治、太田洋子、金子安夫
小池一廣、小出和夫、小関康江、鈴木弘行
鈴木玲子、田原大三、千野慎一郎、長澤靖夫
長澤義和、乳井昌史、長谷川良子、原　悦子
三宅芳則、八十濱俊一、湯山　薫、渡辺悦子
渡辺幹夫、大島葉子

(4) 第16回「若山牧水賞授賞式」（主催：宮崎県、宮崎県教育委員会、宮崎日日新聞社、延岡市、日向市）
日　時：平成24年2月5日(日) ～ 2月8日(水)
会　場：宮崎市 宮崎観光ホテル（受賞記念講演会：カルチャープラザのべおか）
受賞者：大下一真氏「月食」
参加者：林　茂樹、浅井　治、長澤靖夫、原　悦子
三宅芳則、大島葉子

2　第58回沼津牧水祭の運営

(1) 短歌大会
日　時：平成23年10月2日(日)　午前10時30分～午後4時
会　場：沼津市立図書館　視聴覚ホール
講　師：大島史洋氏（第14回若山牧水賞受賞者、「未来」編集委員・選者）
応募短歌：134首　参加者：83人

(2) 碑前祭・芝酒盛
日　時：平成23年10月16日(日) 午前11時～午後2時
会　場：千本浜公園　牧水歌碑前　参加者：448人

3　文学講演会及び文学講座等の開催

(1) 文化講座「家紋について」
日　時：平成23年9月3日(土) 午後1時30分～3時45分
会　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
講　師：八十濱俊一氏　参加者：33人

(2) 文化講座「戦後の短歌について」
日　時：平成23年10月30日(日) 午後1時30分～3時30分
会　場：沼津市若山牧水記念館会議室
講　師：曽根耕一氏　参加者：25人

(3) 文化講座「茶の湯と美意識」
日　時：平成23年11月19日(土) 午後1時30分～3時30分
会　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
講　師：四方宗弥（一弥）氏　参加者：46人

(4) 第24回「雛の歌会」
日　時：平成24年3月3日(土) 午後1時30分～4時
会　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
講　師：川野里子氏（第15回若山牧水賞受賞者、「かりん」編集委員）
応募短歌：77首　参加者：59人

(5) 初心者のための短歌講座
日　時：平成23年4月～平成24年3月
毎月第2土曜日 午前10時～12時
会　場：沼津市若山牧水記念館会議室
講　師：須永秀生氏　参加者：11回開催　延べ217人

(6) 牧水記念館短歌会
日　時：平成23年4月～平成24年3月
毎月第2土曜日 午後1時30分～3時30分
会　場：沼津市若山牧水記念館会議室
講　師：須永秀生氏　参加者：11回開催　延べ132人

(7) 牧水記念館俳句会
日　時：平成23年4月～平成24年3月
隔月第4日曜日 午後2時～4時30分
会　場：沼津市若山牧水記念館会議室
講　師：榎本好宏氏　参加者：4回開催　延べ86人

(8) 書道講座
日　時：平成23年4月～平成24年3月
毎月第3火曜日 午後1時～3時
会　場：沼津市若山牧水記念館会議室
講　師：成田真洞氏　参加者：10回開催　延べ76人

(9) 第22回「中学生短歌コンクール」募集・表彰
募集期間：平成23年5月13日(金) ～ 9月10日(土)
応募短歌：1,877首（15校 1,877人）
入選短歌：52首
選　者：青木朝子、須永秀生、杉山芳春、曽根耕一
星谷亜紀
表　彰：平成23年10月16日(日) 沼津牧水祭碑前祭にて

4　企画展示

(1)「家紋について」の展示
期　日：平成23年8月30日(火) ～ 9月11日(日)
会　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ　入場者：276人

(2)「中学生短歌コンクール」入賞歌作品展示
（成田真洞氏揮毫による特選歌10首、入選歌42首の短冊）
期　日：平成23年10月16日(日) ～ 10月30日(日)
会　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ　入場者：407人

(3) 平成23年度書道講座受講者作品展示
期　日：平成24年3月21日(水) ～ 3月31日(土)
会　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ　入場者：297人

5　音楽イベント

男性コーラス《夢鳴群》日本 心に残る、思い出の歌
日　時：平成23年6月11日(土) 午後6時30分
会　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
出　演：夢鳴群（コーラス）、中川貴久美（ピアノ伴奏）、大古田郷子（マリンバ）
来場者：125人

古楽コンサートシリーズ26「うたとチェンバロの夕べ」
日　時：平成23年10月22日(土) 午後6時45分
会　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
出　演：萩原明美、小林教子（ソプラノ）、杉山佳代（チェンバロ、クラヴィコード）
来場者：110人

ヴァイオリンと尺八で奏でる「日本の心」
～ 蝋燭の明かりとともに ～
日　時：平成24年2月25日(土) 午後6時30分
会　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
出　演：山内達哉（ヴァイオリン）、大河内淳矢（尺八）、小堺香（ピアノ）、井尻兼人（チェロ）、鍋山純男（蝋飾人）
来場者：134人

古楽コンサートシリーズ27「ヴィオラ・ダ・ガンバとチェンバロによるJ.S.バッハの夕べ」
日　時：平成24年3月17日(土) 午後6時45分
会　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
出　演：品川聖（ヴィオラ・ダ・ガンバ）、杉山佳代（チェンバロ）
来場者：110人

6　公益法人制度改革に伴う公益社団法人への移行
申　請：平成23年12月1日(木)
静岡県公益認定等審議会からの答申：平成24年2月10日(金)
静岡県知事から公益社団法人認定書発行：平成24年3月19日(月)
登　記：平成24年4月1日(日)

公益社団法人沼津牧水会定款（抜粋）

第一条　この法人は、公益社団法人沼津牧水会と称する。

第二条　この法人は、主たる事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の一一に置く。

第三条　この法人は、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深め、短詩型文学の普及を図り、もって、教育文化の振興に寄与することを目的とする。

第四条　この法人は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

(1) 歌人若山牧水に関する調査研究
(2) 沼津牧水祭（短歌大会及び碑前祭）の運営
(3) 文学講演会、文学講座等の開催
(4) 文学に関する各種出版物の刊行
(5) 沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託
(6) その他この法人の目的を達成するために必要な事業

第五条　この法人に次の会員を置く。

(1) 正会員　この法人の目的に賛同して入会した個人又は団体
(2) 賛助会員　この法人の事業を援助する個人又は団体
(3) 名誉会員　この法人に特に功労のあった者で、会員総会の決議をもって推薦されたもの

2　前項の会員をもって、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律上の社員とする。

第六条　この法人の会員になろうとするものは、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名誉会員に推薦された者は、入会の手続を要せず、本人の承諾をもって会員となるものとする。

第七条　この法人の事業活動に経常的に生じる費用に充てるため、会員になった時及び毎年、会員は、会員総会において別に定める額を支払う義務を負う。

公益社団法人沼津牧水会入会金及び会費規程

第一条　この規程は、公益社団法人沼津牧水会定款第七条に基づき、入会金及び会費について定めることを目的とする。

第二条　定款第七条第一項に規定する入会金は、次のとおりとする。

(1) 正会員　一〇、〇〇〇円
(2) 賛助会員　三〇、〇〇〇円以上

第三条　定款第七条第一項に規定する会費は、次のとおりとする。

(1) 正会員　五、〇〇〇円（年額）
(2) 賛助会員　一〇、〇〇〇円以上（年額）

〈理事長〉林　茂樹
〈副理事長〉杉山　光男　須永　英男
〈理　事〉浅井　治　保坂　輝夫　田中　和男　金子　安夫　四方　一弥
八十濱俊一　杉山　芳春　長澤　靖夫　青木　朝子　星谷　昭子
〈監　事〉杉山　重義　鈴木　弘行
〈事務局〉大島　葉子　伊藤早智子　近藤美智代　納谷　瑞穂

編集後記

日本中が悲しみに包まれた東日本大震災から一年余、福島第一原発事故の影響もあって、復興が思うように進んでおりません。被災された人々への一層の支援が求められていると思われます。

第一四回「若山牧水賞」の受賞者の大島史洋先生から「若山牧水の歌」と題する玉稿を頂戴いたしました。

昨年一〇月に群馬県の暮坂峠で開催された「牧水まつり」に、本会から二二名がバスツアーで参加しました。また、本年二月に催された「若山牧水賞授賞式」に六名参加しました。参加記録としての「紀行文」を千野慎一郎会員と浅井治理事に寄稿していただきました。

「沼津牧水祭・短歌大会」の講師に大島史洋先生、「雛の歌会」の講師に川野里子先生をお迎えいたしました。共に充実した歌会を催すことができました。

「沼津牧水祭・碑前祭」も好天に恵まれ、ご遠方からも大勢ご参加いただき、賑やかに開催できました。

文化講座として、八十濱俊一氏の「家紋について」、曽根耕一氏の「戦後の短歌について」、四方一弥氏の「茶の湯と美意識」を催し、大好評でした。「短歌」「俳句」「書道」の各講座、「記念館コンサート」も好評でした。

本年は、本会設立二五周年・沼津市若山牧水記念館開館二五周年の記念の年です。一一月に「特別企画展」「若山牧水顕彰全国大会」「日本ほろよい学会」を記念事業として開催いたします。ぜひ、ご参加ください。

本会は、四月一日から「公益社団法人」としての新たな一歩を踏み出しました。変わらぬご支援ご指導を賜りたくおねがい申し上げます。

■会報「幾山河」第25号 ■平成24年5月15日発行 ■編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 ■〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11
TEL・FAX〈055〉962-0424　E-mail：bokusui@thn.ne.jp　URL：http://web.thn.jp/bokusui/　■印刷 ㈱耕文社